

TARO

賞

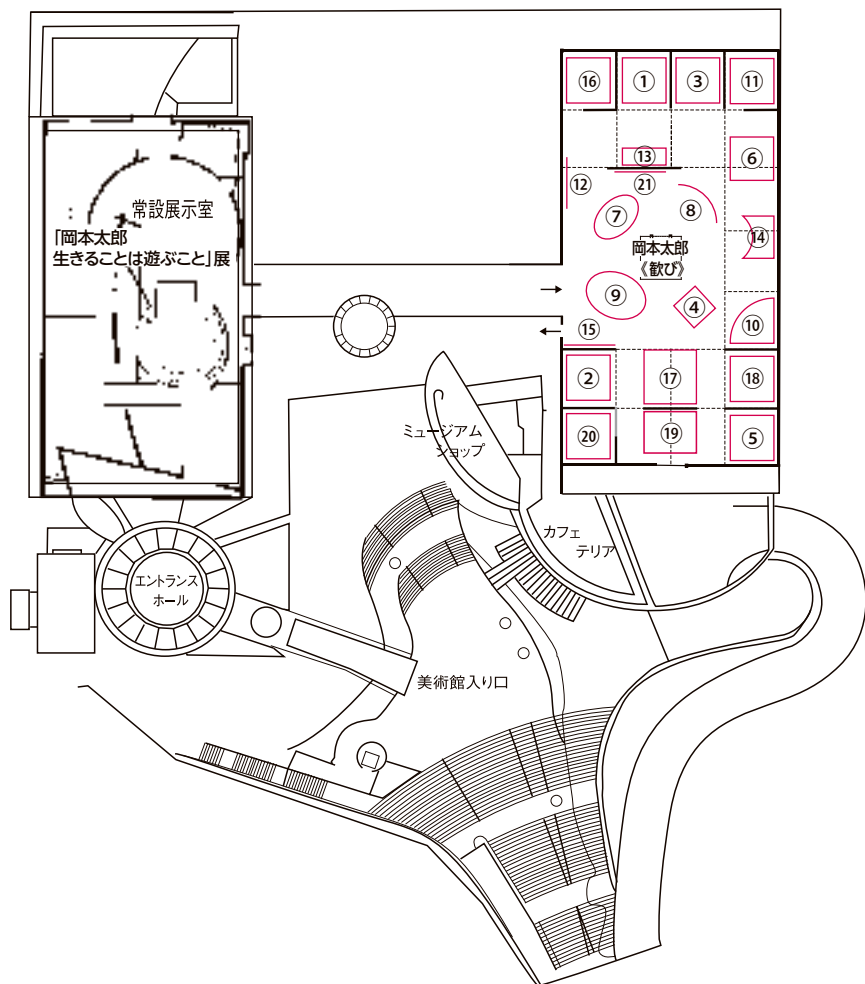
第29回

岡本太郎現代芸術賞展

The 29th Exhibition of the Taro Okamoto Award for Contemporary Art



川崎市 岡本太郎美術館
Taro Okamoto Museum of Art, Kawasaki



- ①高田 哲男／②馬場 敬一／③宇佐美 雅浩／④櫻井 隆平／⑤鈴木 藤成／⑥Soma Tsuchida／
 ⑦みずかみ しゅうと／⑧吉村 大星／⑨安西 剛／⑩太田 遼／⑪KUMO (YUKI MORITA & RYUDAI MISAWA)／
 ⑫黒木 重雄／⑬Shinon Matsumoto／⑭鈴木 美緒／⑮田辺 朋宣／⑯徳本 道修／⑰西久松 友花／
 ⑱Hexagon artist®／⑲ミカ星(オガワミチ+石倉かよこ+館星華)／⑳毛利 華子／㉑山田 徹

ごあいさつ

時代に先駆けて、たえず新たな挑戦を続けてきた岡本太郎。

岡本太郎現代芸術賞は、岡本の精神を継承し、自由な視点と発想で、現代社会に鋭いメッセージを突きつける作家を顕彰するべく設立されました。

今年で29回目を迎える本賞では、644点の応募があり、創造性あふれる21組の作家が入選を果たしました。

21世紀における芸術の新しい可能性を探る、意欲的な作品をご覧ください。

2026年1月

公益財団法人 岡本太郎記念現代芸術振興財団
川崎市岡本太郎美術館

Introduction

Taro Okamoto was an avant-garde artist who took on new challenges ceaselessly. The Taro Okamoto Award for Contemporary Art was established to honor artists who have inherited Taro's will to present sharp messages to society based on unfettered ideas and unique viewpoints.

The award, which is now in its 29th year, attracted 644 solicitations of artwork, and the prize was given to 21 artists. We hope that you enjoy the highly-motivated that explore the possibilities of fine art in the twenty-first century.

January 2026

Taro Okamoto Memorial Foundation
Taro Okamoto Museum of Art, Kawasaki

入選作家(50音順)

安西 剛 ANZAI Tsuyoshi

宇佐美 雅浩 USAMI Masahiro

太田 遼 OHTA Haruka

KUMO (YUKI MORITA & RYUDAI MISAWA)

黒木 重雄 KUROKI Shigeo

櫻井 隆平 SAKURAI Ryuhei

Shinon Matsumoto

鈴木 藤成 SUZUKI Tosei

鈴木 美緒 SUZUKI Mio

Soma Tsuchida

高田 哲男 TAKATA Tetsuo

田辺 朋宣 TANABE Tomonori

徳本 道修 TOKUMOTO Dohshu

西久松 友花 NISHIHISAMATSU Yuka

馬場 敬一 BABA Keiichi

Hexagon artist®

ミカ星 (オガワミチ+石倉かよこ+舘星華)

MIKABOSHI (OGAWA Michi/ISHIKURA Kayoko/TACHI Seika)

みずかみ しゅうと MIZUKAMI Shuto

毛利 華子 MOHRI Hanako

山田 徹 YAMADA Toru

吉村 大星 YOSHIMURA Taisei

審査員(50音順)

榎木 野衣 美術批評家／多摩美術大学教授

土方 明司 川崎市岡本太郎美術館館長

平野 暁臣 空間メディアプロデューサー／岡本太郎記念館館長

山下 裕二 美術史家／明治学院大学教授

和多利 浩一 ワタリウム美術館キュレーター

ゲスト審査員

福田 美蘭 現代美術家

<凡例> 作家ごとに次のデータを掲載しました。
氏名、作品名、作品サイズ(高さ×幅×奥行)cm、
素材、作家の言葉、作家略歴など





作品名 **FUKUSHIMA5000**

作品サイズ 500×500×500cm

素材 画用紙にインクボールペン、土のう袋、フレコンバッグ、ポストカード袋、塩ビパイプ、ブラダン、ジョイント / Ballpoint pen on Paper, Sandbags, Flexible containers, Postcard bag, PVC pipe, Plastic corrugated board and Joint

■作家の言葉

2018年、福島第一原発に隣接する福島県富岡町を訪れた時、山積みの黒いフレコンバッグが、見渡す限り埋めつくす光景を目にし、衝撃を受けたことが作品制作の発端です。

東日本大震災から15年(5440日)経ちました。その日数と同じ枚数のイラストを描いています。

我々が目にするニュースや広報、さらに現地に赴いて見て得た情報を元に、住民や廃炉作業員の活動など、事故と廃炉と復興を様々な角度で捉えて描きました。

福島事故と復興を、被災者だけでなく、我々皆が共有すべき記録と記憶にしようとする試みです。

■略歴

1972 兵庫県生まれ

1994 流通科学大学商学部流通学科 卒業

1998 神戸デザイナー学院夜間部 卒業

■受賞

2017 兵庫県展 デザイン部門大賞

2023 第26回岡本太郎現代芸術賞 入選

2024 第68回新槐樹社展 新人賞

三木市文化芸術奨励賞



審査評

東日本大震災から15年となる2026年。わたしたちの国土はなお、毎日のように地震で揺れ、津波に警戒し、そのたびに原子力発電所の安否に聞き耳を立てている。作者は、過ぎていった日々の積み重ねを、放射能で被災した地域の地方紙や報道などをもとに、誰にでも入手できる簡素な素材とインクボールペンで描いた延べ5440枚（大震災から5440日）の素描をもとに、巨大なモノクロームの集積に仕上げた。原発事故という甚大な出来事と、日々の記録とのギャップが、この塊の中で一体のものとなり、わたしたちの「現在」の前にうずたかく積み重なっている。（榎木野衣）





作品名 死と再生のイニシエーション / Initiation of Death and Rebirth

作品サイズ 500×500×500cm

素材 ダンボール、樹脂、木炭、アクリル絵具

Cardboard, Resin, Charcoal and Acrylic

■作家の言葉

鬱で得た死生観を、自我・髑髏・女神による三位一体で綴る、私が主人公の独自の神話的世界。死への欲求に囚われた制作当初のモチーフは私と髑髏だけ。苦しみから逃れたいと祈るようにナラティブを描き進めるうちに、寄り添い続けてくれたパートナーが傷だらけの女神として現れた。傷は輝きを纏い、負は正に転じた。

描き、破壊し、再構築し、固める。誕生、死、再生、永遠、を象徴する工程が「死と再生」の疑似体験となり、死に呑み込まれかけた私を救済した。

■略歴

1974 東京生まれ

■受賞

2018 「第14回世界絵画大賞展」東京都知事賞

2019 「小松ビエンナーレ2019 第5回宮本三郎記念デッサン大賞展」佳作

「第15回世界絵画大賞展」協賛社賞・パイロットコーポレーション賞

■近年の個展

2023 「GOLDEN DAYS」(gallery Q/東京)

2024 「死と再生のイニシエーション」(YUGEN Gallery/東京)

2025 「死と再生のイニシエーション福岡巡回展」(YUGEN Gallery/福岡)

審査評

最も強烈なインパクトを与えた作品である。「鬱で得た死生観」をもとにネガティブなエネルギーから出発し、「描き、破壊し、再構築し、固める」という工程を経て、「誕生、死、再生、永遠」を象徴する作品へと昇華させた。そんな制作過程を記録した映像によって、鑑賞者も追体験することができる。段ボールにモノクロームで描かれた自画像、髑髏、女神は樹脂で固められることによって妖しい光を纏う。ネガティブなエネルギーを見事にポジティブに変換した、モニュメンタルな大作である。(山下裕二)





作品名 Manda-la in Hiroshima 80 years after the atomic bombing

作品サイズ 178×234.7×8cm / 146×178×7.8cm

素材 銀塩プリント、インクジェットプリント、ビデオ、ミクストメディア
Gelatin print, Inkjet print, Video and Mixed media

■ 作家の言葉

今年は、原爆が広島に投下されてから80年。

私は、広島の人々とともに合成を一切行わず、「Manda-la」という手法で一枚の写真を撮影してきた。

2014年には、被爆した女性の体験をもとに、広島市民約500人と一枚の写真を制作。

そして10年後の2024年には、原爆投下地点から直線距離で約24km離れた東広島市で、キノコ雲を目撃した女性の体験を市民約300人とともに一枚の物語として撮影した。

被爆者の平均年齢は86.13歳。広島の人々と向き合うなかで気づいたのは、原爆体験の風化である。

この作品には、広島の人々の記憶を未来に伝える使命がある。

■ 略歴

1972年千葉県千葉市生まれ。1997年武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業。様々な地域や立場におかれた人々とその人物の世界を表現するものや人々を周囲に配置し、仏教絵画の曼荼羅のごとく一枚の写真に収める「Manda-la」プロジェクトを大学在学中から四半世紀以上続けている。

■ 個展

2015 「Manda-la」(ミヅマートギャラリー / 東京)

2017 「Manda-la in Cyprus」(PAFOS2017/キプロス)

「広島アーツスポット Vol.4 宇佐美雅浩」(旧日本銀行広島支店/広島)

2022 「Manda-la in Sado」(さどの島銀河芸術祭2022/新潟)

2024 「声なきラガーマン 神宮外苑 2023」(ミヅマートギャラリー / 東京)

2025 東広島市制50 周年記念「Recollection ⇄ Vision 東広島の過去・現在・未来」(東広島市立美術館/広島)

「Manda-la Somewhere」(art cruise gallery/東京)

■ パブリックコレクション

千葉市美術館、東広島市立美術館、両津郷土博物館

審査評

一見、合成写真のように見えるが、すべて画面を作り込んだ上での写真撮りである。完成に至るまでに、参加ボランティアとの打ち合わせ、取材地撮影の許可等々、数年の時間をかける。出品作の2点は被爆地に何らかの関連を持つ、市民数百名が参加している。参加者各自の記憶の思いと、舞台芸術を思わせる緻密な構成と演出が相乗し、現場写真ならではの強い訴求力を持つ作品となった。(土方明司)



作品名 Rotating objects No.3 : too close to be real

作品サイズ 210×300×300cm

素材 フローラルフォーム、石など
Floral foam, Stone and Mixed media

■作家の言葉

今作は、脆いスポンジで戦車をつくり、石の重みで少しずつ削られていく仕組みになっています。戦争を知識としては知っていても、実感をもって捉えることは難しい。遠い現実よりも、足元の石のほうが確かに「ある」と感じられることもあるでしょう。その距離感は、今を生きる私たちに通ずる感覚かもしれません。同時に、何を尊いと感じ、どんな物質やモノに価値を見出すのかという問いにもつながっています。反戦を超えて、現実をどう受け取り、どう距離を測るのかを問い直す試みです。

■略歴

1993 群馬県生まれ

2017 多摩美術大学大学院美術研究科彫刻専攻 修了

■主な展示・受賞

2015 「Art Award Tokyo Marunouchi 2015」(東京) 入選

2016 個展「Trial」(東京)

個展「櫻井隆平展」(東京)

2019 「かみこあにプロジェクト」(秋田)

2020 個展「Revealing」(秋田)

2022 「SICF23」(東京) スパイラル奨励賞

2025 「群馬青年ビエンナーレ2025」(群馬) 入選

「中之条ビエンナーレ2025」(群馬)

審査評

脆いスポンジの素材でつくった戦車を、観覧者がハンドルを回すことで少しずつ削られてゆくというリアリティーは、面白さの中に、遠い土地で起こっている戦争という現実に対する感覚のズレを呼び起こし、私達の日常を認識するために、現実をどの様に受け取るかについての彫刻としてのあらたな可能性を示している。作者の遊びの精神が新しい視点や発想を生み出す力となっていて秀逸だ。(福田美蘭)



作品名 僕と鬼の云々 / The Unspeakable Tale of Me and the Ogre

作品サイズ 336×500×500cm

素材 綿布にインクジェットプリント、アクリルガッシュ、真砂土、ブルーシート、樹脂
Inkjet print on Cotton fabric, Acrylic gouache, Sandstone, Blue tarp and Resin

■作家の言葉

山形の限界集落で神社を護る家に生まれた私は、共同体が静かに崩れゆく中で、伝統がどのように生きられるのかを問い続けてきた。

本作では、神社の写真に赤と青の文字や切り抜きを重ね合わせた絵画と地域から拾遺したブルーシートから形作った鳥居を構成した。

赤は血や炎症の疼き、青は疎外と境界の膜となり、対立する2つの自己を表す。蛹化するかつての聖域の中で私は、伝統と現代を縋り交ぜにし、損傷と修復を繰り返しながら、なお新しい継承のかたちを見出そうとしている。

■略歴

2001 山形県生まれ

2023 東北芸術工科大学 芸術学部 美術科 日本画コース 卒業

2025 東北芸術工科大学 大学院 芸術工学研究科 芸術文化専攻 複合芸術領域 修了

現在、同大学の日本画コース副手として勤務しながら制作活動続ける

■受賞・展示

2023 「DOUBLE ANNUALE 2023」～反応微熱～これからを生きる力～(国立新美術館)

「タイムトリップ・アンド・ミックス」(福島県白河市旗宿関ノ森白河の関)

2024 「山形ビエンナーレ2024 現代山形考～山はうたう～」(東北芸術工科大学7階[THE TOP])

「奇遇の魔方陣」グループ展(Q1 [The Local])

2025 「DOUBLE ANNUAL 2025 アニユラスのじゃぶじゃぶ池／omnium-gatherum」(国立新美術館)

審査評

ブルーシートを素材にして制作を続けている作家の最新作。鬼という題材をブルーシートの青と樹脂による赤によって呪文のような祝詞のような文字で埋め尽くされている。現実の出力写真に幾つものレイヤーを重ね、過去とスピリチュアルの世界を重くなり過ぎないように表現することに成功している。展示スペースの入り口にあるブルーシートの鳥居も儚さと時間の経過、精神世界の不可視化を上手く表現できている。(和多利浩一)



作品名 自己完結型創造症候群 / Self-Contained Creativity Syndrome

作品サイズ 500×500×500cm

素 材 段ボール、油性ペン(油性インク)、アクリル絵具、油絵具、軽量粘土、クレヨン、EVA系ホットメルト接着剤 / Cardboard, Oil-based ink markers, Acrylic paint, Oil paints, Lightweight modeling clay, Crayons and EVA-based hot melt adhesive

■ 作家の言葉

私は、無意識の中にこそ創造の源があると信じています。記憶や夢の断片が交錯し、形を成す瞬間、それは発想ではなく発掘に近い。秩序を拒み、曖昧さの中に真実を置く。「自己完結型創造症候群」とは、外界に頼らず内なる宇宙を掘り進む私の創造の在り方です。

■ 略歴

2006 京都府生まれ

■ 受賞・展示

2021 城陽市文化芸術奨励賞(京都)

2022 子ども文化芸術ノーベル賞(京都)

個展「Somaる展」(興聖寺/京都)

2023 「第13回大阪成蹊全国アート&デザインコンペティション」

文部科学大臣賞(グランプリ)

個展「Somaる展」(ギャラリー梧桐/京都)

■ 収蔵

2025 関西文化芸術高等学校「創造の泉」収蔵

審査評

まずは圧倒的な物量感とその裏に伏流する創造への熱量に眼が釘付けになった。チープなダンボール片が古代遺物のごとき取り澄ました佇まいでこちらをまっすぐ見てくる。テーマは「内面世界の視覚化」であり、自分の奥底に眠っているものを「発掘」する。それが作者の意図だ。この「遺跡」から観る者が彼の内面に触れることはむずかしいにしても、この誠実で偏執的な空間から、記憶の深度と多層性だけはわかる。19歳とは驚きだ。(平野暁臣)



作品名 4羽のメジロのための棺桶 / Coffins for four White-eyes

作品サイズ 185×345×387cm

素材 鉄、スタイロフォーム、羽、テラコッタ、樹脂、木、プラスチック、その他
Iron, Styrofoam, Feathers, Terracotta, Resin, Wood, Plastic, etc.

■作家の言葉

ある日、大学の構内で蛇を見つけました。その蛇を友人と捕まえたところ、メジロの雛を4羽吐き出しました。幼い頃よりバードウォッチングをしており鳥に思い入れのある自分は、そのメジロの雛のために棺桶を制作することにしました。

蛇に負けないでほしいと願う気持ちから棺桶のモチーフとして戦闘機を選びました。制作中に棺桶の表面に羽根を1枚1枚植えることが辛いになるのではないかと考え、合計約3万枚の羽根を使用しました。

4羽の雛それぞれを納めるために小さな棺を作り、その中には空の絵を描きました。

■略歴

2001 東京都生まれ

2025 東京藝術大学 美術学部 彫刻科 卒業

東京藝術大学 美術研究科 彫刻専攻 在籍中

■個展

2023 「初期のみずかみ」(Hidari Zingaro 東京 中野)

■受賞・探択

2023 GEISAI#22 Chris Le Award

2025 東京藝術大学卒業作品 サロン・ド・プランタン賞、平成藝術賞

クマ財団 クリエイター奨学金 第9期生

P.O.N.D.AWARD 2025 グランプリ受賞

審査評

一見して単に戦闘機をかたどった彫刻作品かと思ったが、細部に眼を凝らせば、実は「棺桶」であることに気づく。コクピットの部分には4つの小さな棺が収められており、その中には蛇に飲まれた4羽のメジロの雛の死骸が入っている。戦闘機がまとう鳥の羽根は、なんと約3万枚。弱きものの死を悼み、その再生を願う作者の心情が結晶した作品である。戦闘機の上に載る天使の造形も見事である。(山下裕二)





作品名 丁寧な対話 / Polite dialogue

作品サイズ 205×500×250cm

素材 水彩紙、色鉛筆、木製パネル、金具

Watercolor paper, Colored pencils, Wood panel and Metal fittings

■作家の言葉

この作品のテーマは親子の関係性です。

父、吉村芳生の「①無数の輝く生命に捧ぐ」とサイズ、構図は同じです。色彩に関しては主観的な表現を目指したつもりですが、自分の中で常に主観と客観がせめぎ合っていました。①は父の回顧展でのメインビジュアルでした。僕にはどうしても腕に落ちないものあって、それを解明するためにこの「丁寧な対話」を創作しました。

■略歴

1992 山口県生まれ

■個展

2019 吉村大星やり残したことに気がついた(山口)

■グループ展

2013 「未来の体温 after AZUMAYA」(東京)

2015 「越後妻有アートトリエンナーレ2015 今日の限界芸術百選」(新潟)

2016 「村上隆のスーパーフラット・コレクション」(横浜)

2018 「吉村芳生と吉村大星365日エンピツ画」(広島)

■受賞歴

2020 第26回エネルギー美術賞

2021 第72回山口県芸術文化振興奨励賞

2022 第75回山口県美術展覧会 大賞

審査評

一見して美しい細密画に見える作品は、2013年に亡くなった父、吉村芳生による色鉛筆画と同じ寸法、構図、手法で描かれた模写であり、この常軌を逸したとも取れる偏執的な制作には、父親という不可分な関係と真正面から対峙しようとする覚悟が滲み出ている。身体性を通して完成に至るプロセスがこの作品を理解するためには重要であり、そこから生み出された強く静謐な美しさは超絶技巧の枠を超えた別のものである。(福田美蘭)



作 品 名 **Giant Micro Plastic**

作品サイズ 700×500×500cm

素 材 紙にインクジェットプリント
Inkjet print on Paper

■ 作家の言葉

この物体はでっかいマイクロプラスチックです。海岸で採集したマイクロプラスチックを3Dスキャンし超マクロ撮影した写真をマッピングし、巨大なペーパークラフトとして再構成しました。プラスチックは工場で大量生産されたものです。しかし、細かい破片となった彼らを拡大して見てみると一つとして同じものは存在しないことに気づかれます。今こそ叫ぼう。プラスチックフリーではなくフリープラスチック! (プラスチックを解放せよ)

■ 略歴

東京生まれ埼玉育ち千葉県在住

2009 東京藝術大学 音楽学部 音楽環境創造科卒業

2011 東京藝術大学 大学院 映像研究科 メディア映像専攻修了

■ 個展・グループ展・受賞など

2020 個展「アベルト12 安西剛 [ポリ-]」(金沢21世紀美術館/石川)
ポーラ美術振興財団 若手芸術家の在外研修助成 (ベルリン、ドイツ)

2022 グループ展「EXTENDED PRESENT – TRANSIENT REALITIES」(ルートヴィヒ美術館/ブダペスト)

2024 令和6年度 文化庁メディア芸術クリエイター育成支援事業
国内クリエイター創作支援プログラム

富士フイルム「GFX Challenge Grant Program 2024」
優秀賞

2025 グループ展「ポーラ ミュージアム アネックス展 2025【後期】マテリアルの可能性」(ポーラ ミュージアム アネックス/東京)
「千葉国際芸術祭2025」(稲毛記念館/千葉)

作 品 名 **建築のような物体X / Something like the thing**

作品サイズ 500×500×500cm

素 材 アルミマウント、印画紙、テープ、木材など
Aluminum mounted photo print, Photo paper, Adhesive tapes, Woods, etc.

■ 作家の言葉

不動産サイトに掲載された販売中の建売住宅。そこに写る「まだ誰も住んでいない家」は、果たして建築と言えるのだろうか。

本作では、サイト掲載写真をもとに模型を作り、深夜に実際の建物の前で撮影を行う写真シリーズと、その一つを拡大し、印刷したA4印画紙を繋ぎ合わせて実物大の家型へと構成した立体作品を展開する。解像度の荒れた「家」は、近づくほどに輪郭を失い現実の空間とイメージの間に揺らめく。

本作は、イメージと現実、風景との距離を問い直し、既にそこに建ちながらも透明化されがちな、掴みきれない存在としての「建築のようなもの」を見つめる試みである。

■ 略歴

1984 東京都生まれ

2010 武蔵野美術大学大学院 デザイン専攻建築コース 修了

■ 展覧会歴、レジデンスなど

2020 「The Department Store No.1」Open Circuitとのコラボレーション(elephant space/韓国 ソウル) グループ展

2021 「Dear Camus 2021」(ELEPHANTSPACE/韓国 ソウル) グループ展

2022 「Art Plug Yeonsu (Land-ing Pageとして参加)」(韓国

/仁川)レジデンス

「Treasure Hill Artist Village (TOKAS二国間事業)」(台湾 / 台北)レジデンス

2023 「誰かのシステムがめぐる時」(TOKAS 本郷 /東京) レジデンス成果展

2025 「IAMNOWHERE」(旧ユーススタイルビル /青森県 青森市) 自主企画による2人展



作 品 名 **Your Discipline**

作品サイズ 230×500×500cm

素 材 監獄、中央監視塔、双眼鏡、SNS、小型ディスプレイ、便器、ロール紙
Prison, Watch tower, Binoculars, Social media, Small display, Toilet and Paper roll

■ 作家の言葉

私たちは、複雑化していく社会の中で、知覚できていない空間や時間を起点にし、環世界を拡張する制作を行なっている。

『Your Discipline』は、公共の場からプライベート空間まで、どの場所であっても携帯を見続けている現状に気づき、バカにしたところから制作がスタートした。

作品を覗いたり、作品に座ったりして当たり前を疑って欲しい。そこで立ち上がるのは、あなたの規律だ。

■ 略歴

YUKI MORITA

2000 福岡県久留米市生まれ、長崎県島原市出身

2025 慶應義塾大学環境情報学部 安宅研&牛山研 卒業

東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻 入学、在籍

RYUDAI MISAWA

2002 東京都生まれ

2021 慶應義塾大学環境情報学部 入学 脇田玲研究室 所属

KUMO

2025.7 「Study:大阪関西国際芸術祭」サイエンス・アートアワード
ファイナリスト

NARITA ART RUNWAY ファイナリスト・オーディエンス賞受賞

作 品 名 **いざござ / Conflict**

作品サイズ 227.5×546.0×4.0cm

素 材 キャンバス、アクリル絵具
Acrylic on Canvas

■ 作家の言葉

広いスタジオに移ったのは15年前のこと。ここでしか描けない絵を描こうと思い、始めたのが5m超の絵。その11点目は、当初、巨大パイプラインの周りでサルたちが戯れているというものでした。ところが、描き進めているうちに、キツネのイメージが現れました。そこで、右下に青い目のキツネを配したところ、サルたちは左上隅に追いやられてしまいました。世界中が「いざござ」だらけなので、絵の中でも「いざござ」が起こってしまいました。



■ 略歴

1962 宮崎県生まれ

1987 筑波大学大学院芸術研究科修了

1993 文化庁芸術家在外研修(ニューヨーク)

2001 ペンシルバニア大学アーティストインレジデンス(フィラデルフィア)

■ 主な展示

2017 「第20回岡本太郎現代芸術賞展」(特別賞)

2018 「第21回岡本太郎現代芸術賞展」

2021 「第24回岡本太郎現代芸術賞展」



作品名 悲壮美 / Desperate determination

作品サイズ 400×500×100cm

素材 珈琲、紙、木パネル、ペン、アクリル、パステル、布、糸、トルソー
Coffee, Paper, Wood panel, Pen, Acrylic, Pastel, Cloth, Yarn and Torso

■作家の言葉

パンデミックと経済不安が覆う現代、目を背けがちな感情と向き合うことの重要性が増えています。現実の苦悩と理想世界の相反する要素が織りなす「悲壮美」は、創造の根本です。

ファッションは、現実の制約の中で内面を表現する手段。絵画は、珈琲の濃淡で夢と現実の狭間を描き、感情を象徴します。

感情や情熱を共有する人々へ、暗く重たい感情と甘美で現実離れた理想が共存する美しさを届けたい。

■略歴

2004 宮崎県宮崎市生まれ

2022 宮崎日本大学高等学校芸術学科 卒業

2025 文化服装学院 アパレルデザイン科 卒業

■受賞

2022 第6回星乃珈琲店絵画コンテスト 最優秀賞

ファッション画展 文化出版局賞・優秀賞 W受賞

全国服飾学校ファッション画コンテスト 文部科学大臣賞

2023 ファッション画展 グランプリ

2024 パリ カルーゼル・デュ・ルーブル 特別賞

■個展・展覧会

2024 「脳動芸術祭」(北海道市外小樽美術館)

個展「断片的な応想」(北海道小樽)

パリ・カルーゼル・デュ・ルーブル

2025 個展「甘い音と夢を喰む」(東京)

2人展「月の囁きの庭」



作品名 春の山の調べ / Scenery of the Spring Mountain

作品サイズ 244×500×400cm

素材 サテン、木材
Satin and Wood

■作家の言葉

富山県朝日町にある春の四重奏をモチーフに立山連峰の形で編み込み、屏風として空間に立ち上げた作品。様々な場所に咲く花の景色を編み込むことで、景色は模様化され、何重にも花に纏わる時間が内包された景色となる。実際に山の風景を見るときに感じる、遠くから見る景色と近くから見る景色の解像度の異なる体験を表現することを試みた。身近に咲く花々を鑑賞者がどこか知っている春の景色として体感し、懐かしい春の記憶を辿ることができたらと考える。

■略歴

1993 東京都出身

2016 武蔵野美術大学造形学部建築学科 卒業

2018 東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程 修了

■主な展示

2021 Thailand Biennale Korat 2021 (Korat Fossil Museum/タイ)

2022 個展「青の色に触れるとき」(Artbar & Guesthouse ennova/静岡)

2023 いしおかアートスケープ(常陸風土記の丘/茨城)

2025 特別展「遠くて近い、時の景色 鈴木美緒展」(朝日町立ふるさと美術館/富山)

■受賞

2016 武蔵野美術大学卒業制作修了制作展 優秀賞・銅賞

2025 FactorISM ART AWARD 2025 グランプリ



作品名 ポーズする毎日。とりあえずの犬 / Every day pose. Dog for now

作品サイズ 227.5×473cm

素材 アクリル、キャンバス
Acrylic on Canvas

■作家の言葉

学生時代、友人の住むアパートで毎日のように集っては飲み会をしていた。そんな思い出をもとに描き始めたのが今作である。

当時、安い発泡酒とスナック菓子を手に友人たちとたわいのない話をしていた。一言でいえば生産性のない毎日。でもそこには、今のようにむやみに世間を気にせず過ごせる場所があった。

自堕落な生活を送っている犬たちは、そのようなポーズをとること、生産性のない無駄な毎日の意義を表明しているのかもしれない。

■略歴

1982 広島県出身

2005 京都造形芸術大学卒業

2019 ~ 福井県在住

■主な個展

2011 「夢のあきらめ旅行」(gallery wks/大阪)

2012 「夢のあきらめ旅行2」(CAP STUDIO Y3/神戸)

2013 「ポーズする毎日の絵」(gallery G/広島)

2025 「Dog on hold」(カフェブルミエ/福井)

■主なグループ展

2010 「第13回岡本太郎現代芸術賞展」

(川崎市岡本太郎美術館)

2019 「ポコラート全国公募vol.8受賞者展」

(アーツ千代田3331/東京)

2024 「はるだよ わんちゃん だいしゅうごう!」

(gallery neki/奈良)



作品名 New Western Paradise

作品サイズ 500×500×500cm

素材 6チャンネル・ビデオ(カラー、サウンド、14分8秒)、PLA(3Dプリント)、布(ポリエステル、レーヨン)、EVA系接着樹脂、合板・木材(FRP樹脂塗装) / 6-channel video (Colour, Sound, 14 min 08 sec); PLA (3D-printed); Fabric (Polyester, Rayon); EVA-based adhesive resin; Plywood and Wood (FRP resin coating).

■作家の言葉

仏教には、呪術的な音楽が存在する。僧侶の肉声だけで奏でられる、祈りと音楽が溶け合うような宗教音楽は、声明(しょうみょう)と呼ばれる。

本作では、寺院という特殊な空間で響き渡る、古来の声楽が作り出す崇高と畏敬の場を、展示空間において再現することにより、現代における宗教芸術の美学と精神性の再構築を試みた。

この声明は、6名の女性たちによって奏でられている。彼女たちは、坊守(ぼうもり)と呼ばれる、寺に嫁いだ女性たちで構成されている。読経はもちろん、登高座に座することも許されない坊守たちは、末だに根強く残る、家父長制の世界の中で生きることを強いられている。

本作を通じて、私自身が持つ、寺院という「私的な公共空間」に対する畏敬と憎悪が交錯した思念を、現代に生きる坊守たちに重ね合わせ、声明の美しい荘厳によって日本の霊性を喚起すると共に、坊守の主体性・仏教が持つ権力構造とその解体について示唆したい。

■略歴

1990年生まれ。福井県敦賀市在住。慶應義塾大学環境情報学部卒業。GradDip(美術史)取得後、ロンドン大学ゴールドスミス校 修士課程在学中(芸術理論)。専門は宗教美術史と現代芸術理論。浄土真宗出雲路派本山 毫猊寺で得度(出家)。御幸山良覚寺副住職。



作品名 Habitat

作品サイズ 500×500×500cm

素 材 陶土、磁器土、釉薬、金、プラチナ、紙、インク、水彩絵具
Clay, Porcelain clay, Glaze, Gold, Platinum, Japanese paper, Ink and Watercolor

■作家の言葉

生き物の営みや営巣、生命の循環について関心を持ち、その生命活動の中で見られる形象をドローイングによって部分的に抽出し、やきものに変換している。

本作は、巨大な建築物のような蟻塚、フグが海底に作るサークル状の巣、カビから伸びる菌糸など、様々な生き物たちの生の痕跡を辿ったものである。

人間は多様な生き物の姿を経て進化し、全ての生き物は歴史を共有しているとも言えるだろう。土の塊を紐状に伸ばし、一段一段積み上げていく。現れた造形は、複数の焼成を経て長い歴史を内包するやきものへと変容する。

■略歴

1992 京都府生まれ

2018 京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻
陶磁器 修了

■受賞

2023 ART & CITY AWARD presentsシエリアタワー中之島
グランプリ2025 令和6年度京都市芸術新人賞
群馬青年ビエンナーレ2025 ガートフェスタ ハラダ賞

■主な個展

2024 「幽けき棲処」(Marco gallery/大阪)

2025 「分解者」(ROD GALLERY/東京)

■主なグループ展

2024 「国際磁器展美濃24」(セラミックパークMINO/岐阜)

2025 「第3回日本国際芸術祭」(大阪・関西万博/大阪)
「SPRING/BREAK Art Show New York City 2025
Exhibition」(75Varick Street/アメリカ)
「-TORILOGY-」(Numero.51 Concept Gallery/イタリア)

作品名 眼珠自我像 / I, as an Eye

作品サイズ 500×500×500cm

素 材 キャンバス、ベニヤ板、木材、スタイロフォーム、ミクストメディア
Canvas, Plywood, Wood, Styrofoam and Mixed media

■作家の言葉

信念は愛、芸術、平和。広大な宇宙の中、この惑星で魂を持つ奇跡を喜びと共に受け止めている。自身の芸術の道のり全てを表現する作品を発表できた事に歓喜している。世の不条理も、経験の表裏も、あらゆる全てが私に教えてくれる。愛する人や尊い人びとのお蔭で、芸術の波紋を広げていく事ができている。人との出逢い、善悪の全てが私の身体を通り抜け、色彩と形になる。命在るもの全てに祝福がもたらされる事を祈り、私は描く。

■略歴

1984 福岡県生まれ

2007 BE-STAFF MAKEUP UNIVERSAL 卒業

2012 香蘭ファッションデザイン専門学校 卒業

■受賞歴など

1993 パイロット平尾地区非行防止ポスター展 最優秀賞(福岡
県中央警察署)

第1回福岡リサイクル運動 小学校児童画ポスター展

最優秀賞(社団法人福岡青年会議所)

2017 衣類における発明【特許第6085663号】(特許庁)

2020 アートブレンド 審査員特別賞(スイス)

2021 ミネルパ2021 ロンドン 2021年度 英国王立美術家協

会名誉会員(マル・ギャラリーズ/イギリス)

アートエキスポニューヨーク2021 最高出展者賞(NY)

2023 「第26回 岡本太郎現代芸術賞展」(岡本太郎美術館)



作品名 ～境界とは何か～ 多摩川グラフィティ / “What The Border Is.” - Tama River Graffiti

作品サイズ 500×500×300cm

素 材 紙、木材、廃材のアクリル板、ミラーシート、ペットボトル、プラスチック、竹、天糸、ワイヤー、木炭、鉛筆、色鉛筆、チャコール、アクリル絵具、ボスca.油性ペン、アクリルインク、テープ類、プロジェクター、照明器具 / Paper, Wood, Scrap acrylic board, Mirror sheet, PET bottles, Plastic, Bamboo, Threads, Wire, Charcoal, Pencil, Colored pencil, Chalk, Acrylic, Posca markers, Permanent markers, Acrylic ink, Tapes, Projector and Lighting equipment

■作家の言葉

ミカ星の3人は、現代アートにおいて常にMarginalな立場に置かれてきた。年齢制限、経歴、その他様々な条件によって。人はなぜ境界線を引きたがるのか。そもそも境界線とは何なのか。その疑問を、最も身近な境界線・東京都と神奈川県を分ける「多摩川」に投げかけた。多摩川はいわば、内でも外でもなく線そのもの。そこには何があるのか。光と影、音、自然と人工、弱者と強者、生きること、共存すること、そして……？

本作は境界線に踏み込むことで、それぞれの「限界」という境界に挑んだ日々の痕跡でもある。

■略歴

2017 多摩美術大学 美術学部 絵画学科 油画専攻 卒業(館 星華)

2019 武蔵野美術大学 造形学部 通信教育課程 油絵学科絵画コース 卒業(石倉 かよこ)

2020 京都造形芸術大学 通信教育部 洋画コース 卒業(オガワ ミチ)

■ミカ星としての個展・グループ展・受賞

2025 「余白のアートフェア 福島広野 ed.2 未決の風景」(広野中央体育館/福島)

「NAMIKI AiR Exhibition 2025」

(並樹画廊市川BRANCH /千葉)

「多摩川アートキャラバン」(昭和女子大学8号館 Learning Commons/東京)



作品名 502号室と / Room 502 and

作品サイズ 500×500×500cm

素 材 油絵の具、キャンパス、カラーボックス、お風呂のイス、浴槽、紙粘土、油粘土、緩衝材、プロジェクター
Oil paint, Canvas, Storage shelf, Shower chair, Bathtub, Paper clay, Oil clay, Bubble wrap and Projector

■作家の言葉

私は匿名の森に住んでいる。帰り道、辺りは暗い。23号棟を抜け24号棟へ。大きな窓と小さな窓。これで1部屋。階段を挟んで、反転する。小さな窓、大きな窓。同じ調子で5階分。これが24号棟。この団地は何号棟まであるのだろうか。いまだに知らない。もうすぐここを離れるのに。この作品はある時賃貸サイトで見たいくつかの空き部屋でなっている。カラーボックスやお風呂の椅子などに、外側は均質のまま、内側に手の痕跡などを重ねた。鍵を開ける。電気をつけた。散らかった部屋。今朝の食器が置きっぱなしだった。

■略歴

1997 東京生まれ

2024 武蔵野美術大学大学院 映像・写真コース 入学、在籍中

2025 中国美術学院 交換留学

■受賞・展示・上映

2022 「国際青年デジタルアート展」台南応用科技大学(台湾)佳作

2023 「SICF24」スパイラル(東京)選出

2024 「London International Creative Competition 2023」(イギリス) Shortlist

2025 「第28回岡本太郎現代芸術賞(TARO賞)」(川崎市岡本太

郎美術館/神奈川)入選

「SiamANIMA」Thai film Archive (タイ)上映

「国際学生・青年アートフェア」中国光谷科技会展中心(中国)選出

「中国新疆世界大学生現代アート作品展」新疆美術館(中国)選出



作品名 民族の蜃気楼～富士と大和型による～ / The mirage of the nation - Fuji and Yamato-class

作品サイズ 390×582×4cm

素材 アクリルスプレー、キャンバス、鏡、マーキングフィルム、ポリエステル樹脂
Acrylic spray, Canvas, Mirror, Marking film and Polyester resin

■作家の言葉

私の世代にとって子供時代にプラモデルを作るという事は、戦車や戦闘機、戦艦を作る事を意味した。それら兵器のカッコ良さに魅せられてコレクションしていくと、次第に国によって開発される兵器の差異に子供ながら気づいてゆく。後年、第二次大戦の様々な文献を読み解いていくと、兵器はその国の根底にある何かを顕わにするモノではないか……。戦争とは「国家総力戦」である。よって兵器の開発や生産、運用はその国を体現していると思えた。しかし自明のごとく戦争は絶対悪であるが、各国兵器のカッコ良さには抗えない自分がいる。このアンビバレンツさ、胸に落ちなさを何とか美術表現として昇華できないか。ただ言い訳かもしれないが、私は現代兵器には全く興味がない。いわゆる殺人を目的とした第二次大戦の兵器ではあるが、どこかクラシックカーを観るような歴史的遺物としての得も言われぬ魅力がある。だがいま世界的な潮流と感じとれる急激な「右傾化」への異議申し立ても行わずにはいられないとも切実に感じている。美術表現として、それぞれの国家としての民族性から立ち現れる「蜃気楼」を画布に炙り出す試みと言えるかもしれない。

■略歴

1967 神奈川県生まれ
1991 東京デザイナー学院ヴィジュアルデザイン科卒業
1993 美学校 菊畑茂久馬教場修了

■賞歴

2003 トーキョーワンダーウォール賞 受賞
2014～2015 うたづアートアワード 入選
2019 MI GALLERY賞受賞
2023 NPO 法人広島インターネット美術館賞受賞
2025 うたづアートアワードビエンナーレ 入選





第1回 岡本太郎記念現代芸術大賞(1997年度)

応募総数 482点
会 場 旧氷川幼稚園
【準大賞】 中山ダイスケ《DELICATE 1996》
金沢健一《音のかげら5》
【入選者】 アラクヒロユキ、安里充広、井上尚子、キブシ、木村俊幸、
高橋俊明、豊島隆弘、宮園広幸

第2回 岡本太郎記念現代芸術大賞(1998年度)

応募総数 307点
会 場 国立オリンピック記念青少年総合センター
【準大賞】 小沢剛《ワンマンブルーショー》
栗野ユミト《闘》
【特別賞】 市川健治《Double Image》、市川平《モニュメント》
【入選者】 青山メイジ、阿部佳明、石井匠、小野博、軽部武宏、
川上和歌子、佐藤久一、佐藤仁美、清水尚、田中清隆、
豊島隆弘、中村桃子、長谷川双葉、服部俊弘、山谷あきら、
山本忠興

第3回 岡本太郎記念現代芸術大賞(1999年度)

応募総数 413点
会 場 国立オリンピック記念青少年総合センター
【準大賞】 N.キデヒト《終わらないにらめっこの抜け殻》
藤阪新吾《よいこの学習》
【特別賞】 SAR《壁のない部屋》、菱刈俊作《死の肖像》
【入選者】 飯沢コウスケ、売野恭子、大岩オスカル幸男、河合晋平、
佐藤誠一、佐野寿子、田村真理子、藤井浩一郎、伏黒歩、
ムラギシマナブ、元島佐織

第4回 岡本太郎記念現代芸術大賞(2000年度)

応募総数 513点
会 場 川崎市岡本太郎美術館
【優秀賞】 開発好明《VANITY》
山口晃《山愚痴誦抄・尻馬八艘飛乃段》
【特別賞】 許田敦子《テッコ》
【入選者】 荒木珠奈、池島弘、坂井存、笹井史恵、杉山健司、
セツ・スズキ、田窪麻周、田島弘庸、中村真紀、西尾康之、
日高伸治、水野亮、山本真紀、渡辺五大

第5回 岡本太郎記念現代芸術大賞(2001年度)

応募総数 327点
会 場 川崎市岡本太郎美術館
【準大賞】 今井紀彰《On The Earth: ぼくの故郷》
【優秀賞】 ヒグマ春夫《DIFFERENCE》
【特別賞】 池上恵一《肩凝リズム》、
小原由子《Did you Say you were lice?》
【入選者】 糸崎公朗、猪鼻秀一、大西康明、尾上正樹、木村俊幸、
坂口啓子、佐藤修一、ソガヒロシ、趙採沃、戸田守宣、
白前晋、牡丹靖佳、村上章一

第6回 岡本太郎記念現代芸術大賞(2002年度)

応募総数 351点
会 場 川崎市岡本太郎美術館
【優秀賞】 天明屋尚《ネオ千手観音》
えぐちりか《ストレンジ・ライフ》
【特別賞】 作間敏宏《colony》、大橋博《fantasia》、
宇治野宗輝《日本シリーズコンプレックス》、
井上亜梨沙《愛染狂 カレイドスコープ》、
大巻伸嗣《ECHO》、秋元珠江《パーセナージュ》
【入選者】 内海聖史、小市亮二、高島大理、青木克史、久保田純代、
小松宏誠、吉沢美沙、小林エリカ・ハマダカオリ、さとうりさ

第7回 岡本太郎記念現代芸術大賞(2003年度)

応募総数 519点
会 場 川崎市岡本太郎美術館
【優秀賞】 小林洋子《時積層》
【特別賞】 赤松ネロ《深海の天気》、さとう凛香《個人ロッカー個展》、
原倫太郎《Wire Frame Towers ver.2》、
横井山泰《わるいくせ》
【入選者】 榎谷豪人、加藤万也、金子佳代、塩谷良太、竹内美紀子、
中崎透、長瀬公彦、中島靖貴、初耳、藤井健仁、水谷一、
48のネオン

第8回 岡本太郎記念現代芸術大賞(2004年度)

応募総数 533点
会 場 川崎市岡本太郎美術館
【準大賞】 藤井健仁《彫刻刑 鉄面皮プラス》
【優秀賞】 さかもとゆり《にくにくントン》
山本電基《個人内戦争1、2》
【特別賞】 斎藤公平《選外》、
棚田康司《父を待つ少年・母を待つ少年》
《蝶少女・天少女・花少女》《少女像》
【入選者】 今井綾子、岩本愛子、大西伸明、小俣英彦、嶋田洋平、
鈴木貴博、高山真理、タムラサトル、知花玲央、もりのしん
じ、平町公、渡辺一杉、平間さゆり、屋代敏博、矢部真知己、
松村泰三、山本忠興

第9回 岡本太郎記念現代芸術大賞(2005年度)

応募総数 518点
会 場 川崎市岡本太郎美術館
【準大賞】 梅津庸一《銀色の僕》
【優秀賞】 風間サチコ《風雲13号地》
【特別賞】 アサノカオリ《あたまがよくなるくすりを飲んだ》、
角文平×田中雄一郎《おかし江戸城》、
まつながあきこ《青く青く晴れわたる空にも雨は降り》
【入選者】 石田泰道、石原次郎、市川健治、大竹利絵子、賀川剣史、
風間真悟、岸本京子∞関口海音、君島彩子、鮫島大輔、
出店久夫、長谷川ちか子、東野哲史、深井聡一郎、
深堀隆介、前田紗野花、和田彰

第10回 岡本太郎現代芸術賞(2006年度)

応募総数 614点
会 場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】 大西康明《restriction sight》
【岡本敏子賞】 菱刈俊作《スペシャルブリッド&アザーストーリーズ》
【特別賞】 角文平×田中雄一郎《ガレージェット》
【入選者】 Antenna、平山好哉、池田学、伊東宣明、狩野哲郎、
笠木絵津子、松本真由子、村田恒、
澤田サンダー×増山麗奈、竹内翔、戸泉恵徳、
矢部ひろすけ、山口理一

第11回 岡本太郎現代芸術賞(2007年度)

応募総数 678点
会 場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】 KOSUGE 1-16 《サイクロドルームゲームDX》
【岡本敏子賞】 上田順平《パチモンガタリ(キンタウルス、イッスン・サ
ム、ピーチ太郎、アカオニクラウスの首、アカオニクラウ
スの靴)》
【特別賞】 ALIMO《リーゾー》、ヤマガミユキヒロ《Night Watch》、
金子良／のびアニキ
《のびアニキの岡本褒太郎現代芸術賞展》
【入選者】 青木美歌、イノウエみゆき、ENERGY CENTER、
勝正光、国谷隆志、後藤靖香、齊藤寛之、塩津淳司、

四宮金一、随行奏子、鈴木基真、竹内尚子、田中英行、
谷口顕一郎、中村宏太、palla/河原和彦、羅樹考鴛鴦、
吉谷慶太、吉田翔

第12回 岡本太郎現代芸術賞(2008年度)

応募総数 611点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 若木くるみ《面》

【岡本敏子賞】 長雪恵《こどものころ》

【特別賞】 山上渡《ウシロノシヨウメン》、
タムラサトル《50の白熱灯のための接点》、
花岡伸宏《ずれ落ちた背中には飯に突き刺さる》、
佐藤雅晴《アパート 11》

【入選者】 ALIMO、飯田竜太、井口雄介、小田原のどか、古池潤也、
坂口竜太、笹倉洋平、柴田英里、
島本了多・エースナカジマ、田中麻記子、長谷川義朗、
福井直子、宮崎直孝、森靖、淀川テック

第13回 岡本太郎現代芸術賞(2009年度)

応募総数 758点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 三家俊彦《The indignant》

【岡本敏子賞】 辻牧子《日常の柔らかな化石》

【特別賞】 ながさわたかひろ《プロ野球画報》、長谷川学《風の前の塵》

【入選者】 浅野健一、入江早耶、梅田哲也、薩山忠臣、加藤寛、
鎌倉明弘、木村リン太郎、クニト、サガキケイタ、島本了多、
須賀悠介、高橋和臣、高橋良、田辺朋宣、Natsu、
原田賢幸、東方悠平、矢津古隆

第14回 岡本太郎現代芸術賞(2010年度)

応募総数 818点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 オル太《つくれの洞》

【岡本敏子賞】 望月俊孝《うつつみ》

【特別賞】 北野謙《our face project》、照沼敦朗《見えるか?》、
山本麻璃絵《ものモノ》

【入選者】 秋永邦洋、池田典子、上山尚宏、大垣美穂子、
おおば英ゆき、大森隆義、加藤正臣、
金子良ノのびアニキ、鎌田あや、川埜龍三、衣川泰典、
熊澤未来子、高野浩子、コフネコトモ子、坂本夏海、
島本了多、高嶋英男、チームやめよう、藤堂安規、二藤建人、
松延総司、諸橋建太郎(BARBARA DARLING)

第15回 岡本太郎現代芸術賞(2011年度)

応募総数 797点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 関口光太郎《感性ネジ》

【岡本敏子賞】 千葉和成《ダンテ「神曲」 千葉和成 現代解釈集「地獄
篇1〜7巻」》

【特別賞】 坂間真実《欲べる(たべる)、吐べる(たべる)》、
メガネ《Energy of dance》

【入選者】 石井誠、猪原隆広、AKI INOMATA、太田祐司、加藤大介、
加納俊輔、北村章、佐藤孝、柴田英里、島本了多と山本貴大、
高木智広、高柳明、竹川宣彰、武田海、CHIE、
東北画は可能か?、丹羽由梨香、松山賢、安田葉、
湯真藤子

第16回 岡本太郎現代芸術賞(2012年度)

応募総数 739点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 加藤智大《鉄茶室微亭》

【岡本敏子賞】 石山浩達《Alien Vision : unlimited oil》

【特別賞】 内山翔二郎《Never die》、eje (エヘ)《ものおと》、
奥原寿行《Eye》、小松原智史《コマノエ》、
湯浅芽美《Momently stratum》

【入選者】 赤川芳之、井口雄介、池平徹兵、伊藤純代、伊奈章之、
宇山聡範、太田侑子、狩野宏明、熊野海、國分郁子、
白井忠俊、葉栗剛、宮崎勇次郎、村上幸織、鷲尾圭介

第17回 岡本太郎現代芸術賞(2013年度)

応募総数 780点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 キュンチョメ《まっかにながれる》

【岡本敏子賞】 サエボーグ《Slaughterhouse-9》

【特別賞】 アートホーリーメン(HORYMANと鯉)、
小松葉月《果たし状》、
じゃぽにか《悪ノリSNS「芸術は炎上だ!」》、
高本敦基《The Fall》

【入選者】 赤松音呂、栗真由美、小山真徳、鈴木雄介、
田中偉一郎×田中十郎、知花玲央、長尾恵那、中村亮一、
萩谷但馬、廣田真丈、文谷有佳里、柵木愛子、吉田晋之介、
吉田和夏

第18回 岡本太郎現代芸術賞(2014年度)

応募総数 672点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 ヨタ/Yotta《金時》

【岡本敏子賞】 久松知子《レバゼン 日本の美術》

【特別賞】 江頭誠《神宮寺宮型八棟造》、佐野友紀《アウラの逆襲》、
藤村祥馬《どれいちゃん号》、
村井祐希《Land scape-TOMIOKA》

【入選者】 吾妻吟、足立篤史、石井明日香、石塚嘉宏、石山哲央、
菊谷達史と四井雄大、金藤みなみ、構想計画所、澤井昌平、
謝花翔陽、杉山恭平、豊福亮、植木野淑子、林楷人、
平林貴宏、牧田愛、的野真祐、三井淑香、森村誠、
山崎広樹、湯川洋康・中安恵一

第19回 岡本太郎現代芸術賞(2015年度)

応募総数 485点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 三宅感《青空があるでしょう》

【岡本敏子賞】 折原智江《ミス煎餅》

【特別賞】 笹岡由梨子《Atem》

【入選者】 井田大介、岩村遼・鹿毛倫太郎・古賀睦、椎の会・林楷人、
川久保ジョイ、國本翼、関川耕嗣、TEAM WARERA、
辻元百合子、坪井康宏、二藤建人、花沢忍、原田武、
本郷芳哉、松下敦子、三角瞳、村上佳苗、村上慧、森本孝、
横山奈美、六無

第20回 岡本太郎現代芸術賞(2016年度)

応募総数 499点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 山本直樹《Miss Iieのみた風景》

【岡本敏子賞】 井原宏路《Cycling》

【特別賞】 井上裕起《salamander [F1]》、黒木重雄《One Day》、
あべゆか《BE GOD.》

【入選者】 井口雄介、石野平四郎、因幡都頼、繪畑彩子、岡野里香、
奥村彰一、加藤真史、川上幸子、工藤千尋、後藤拓朗、
Scott Allen、鈴木伸吾、照屋美優、寿山凡太郎、
富田美穂、ナルコ、福岡幸平、福本歩、MYU mikki、
山田弘幸、ユアサエボン

第21回 岡本太郎現代芸術賞(2017年度)

応募総数 558点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 さいあくななちゃん《芸術はロックンロールだ》

【岡本敏子賞】 弓指寛治《Oの慰養》

【特別賞】 市川デュン《白い鐘》、富安由真《in-between》、
ユウキユキ《ユキテラス大御神☆天岩戸伝説》

【入選者】 荒川朋子、ichiko Funai、大野修平、黒木重雄、黒宮菜葉、
木暮奈津子、近藤祐史、笹田晋平、塩見真由、橋本悠希、
藤本りか、文田聖二、細沼凌史、
○△□《まるさんかくしかく》、村上力、室井悠輔、
矢成光生、横山信人、吉田笑希子、与那覇俊、
ワタリドリ計画《麻生知子・竹内明子》

第22回 岡本太郎現代芸術賞(2018年度)

応募総数 416点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 檜皮一彦《hiwadrome: type ZERO spec3》

【岡本敏子賞】 風間天心《Funetasia》

【特別賞】 國久真有《BPM》、
武内カズノリ《こちふかば(ポッチ・川崎にて)》、
田島大介《無限之超大國》

【入選者】 Art unit HUST 《遠山伸吾、臼木英之》、秋山佳奈子、
赤穂進、イガワ淑恵、井口雄介、大槌秀樹、岡野茜、
革命アイドル暴走ちゃん、梶谷令、佐野友紀、塩見亮介、
瀬川真紀子、田中義樹、服部正志、藤原史江、本堀雄二、
馬嘉豪、宮内裕賢、宮田彩加、吉田尚乃

第23回 岡本太郎現代芸術賞展(2019年度)

応募総数 452点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 野々上聡人《ラブレター》

【岡本敏子賞】 根本裕子《野良犬》

【特別賞】 澤井昌平《風景》、藤原千也《太陽のふね》、
本濃研太《僕のDNAが知っている》、
村上力《㊦一品洞「美術の力」》、
森貴之《View Tracing》

【入選者】 浅川正樹、井上直、大石早矢香、小田万侑子、桂典子、
小嶋晶、笹田晋平、佐藤圭一、そんたく、高島亮三、
春田美咲、藤田淑子、松藤孝一、丸山喬平、水戸部春菜、
村田勇気

第24回 岡本太郎現代芸術賞展(2020年度)

応募総数 616点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 大西茅布《レクニコロス》

【岡本敏子賞】 モリソン小林《break on through》

【特別賞】 植竹雄二郎《self portrait》、牛尾篤《大漁鯉ン魚》、
小野環《再編街》、
唐仁原希《虹のふもとには宝物があるの》、
浮遊亭骨牌《浮遊亭kou i α》

【入選者】 東弘一郎、AYUMI ADACHI、袁方州、太田琴乃、
かえるかわる子、加藤立、金子朋樹、黒木重雄、
さとくみ子、許寧、園部恵永子、ながさわたかひろ、
西野壮平、原田愛子、藤田朋一、みなみりょうへい、
山崎良太

第25回 岡本太郎現代芸術賞(2021年度)

応募総数 578点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 吉元れい花《The thread is Eros, it's love!》

【岡本敏子賞】 三塚新司《Slapstick》

【特別賞】 伊藤千史《書店レジ前の平台》、
硬軟+stenographers《速記美術のエLEMENT》、
藤森哲《往日後来図》、村上力《異形の森》

【入選者】 青山夢、井下紗希、因幡都頼、岡田杏里、岡田智貴、
角文平、GengoRaw（石橋友也+新倉健人）、平良志季、
高田美依、張安迪、津川奈菜、出店久夫、中澤瑞季、
野々上聡人、堀川すなお、森下進士、Yoko-Bon、
与那覇俊

第26回 岡本太郎現代芸術賞(2022年度)

応募総数 595点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【特別賞】 足立篤史《OHKA》、澤井昌平《Landscape》、
関本幸治《1980年のアイドルのノーパン始球式》、
レモコレイコ《君の待つところへ》

【入選者】 池田はなえ、牛尾篤、大洲大作、奥野宏、空箱二郎、
川上一彦、川端健太、柴田英朗、高田哲男、
千原真実、都築崇広、ながさわたかひろ、西除間、
NISHINO HARUKA、平向功一、Hexagon artist®、
宮本佳美、山田愛、山田優アントニ

第27回 岡本太郎現代芸術賞(2023年度)

応募総数 595点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 つん《今日も「あなぐまち」で生きていく》

【岡本敏子賞】 三角瞳《This is a life. This is our life.》

【特別賞】 池田武史《Space-X》、長雪恵《きょうこのごろ》、
小山恭史《無明》、フレメンタイン・ナット《POT-
PLANTS》、月光社《MUSAKARI》、
小山久美子《三月、常陸國にて鯨鯢を食ふ》、
ZENGE HUIRU《BACK-TO-ME》、
タツルハタヤマ《小鳥のさえずりを聞くと、遠くで銃声が
鳴り響いた》、
フロリアン・ガデン《Anomalies-poétiques / 詩的異常》、
村上力《學校》

【入選者】 大河原健太、選四グランプリ実行委員会、
GORILLA PARK、鈴木のぞみ、野村絵梨、林楷人、
村尾かずこ、横草竜之、横山豊蘭、李函桐

第28回 岡本太郎現代芸術賞(2024年度)

応募総数 579点

会場 川崎市岡本太郎美術館

【岡本太郎賞】 仲村浩一《房総半島勝景奇覧/千葉海岸線砂旅行》

【岡本敏子賞】 齋藤玄輔《語り合う相手としての自然》

【特別賞】 井下紗希《森を歩くこと。》

【入選者】 IWACO、大岩美葉、神村あづさ、木原健志郎、
黒田恵枝、斎藤翼、陳豆知、土田祐加、どばしほのか、
西野萌黄、英ゆう、濱本菜花、前田明日美、増田充高、
丸山千香子、武藤攝、毛利華子、望月章司、矢成光生、
山下茜里、山田歩





川崎市 岡本太郎美術館
Taro Okamoto Museum of Art, Kawasaki

〒214-0032 川崎市多摩区枳形7-1-5 生田緑地内
TEL:044-900-9898 <https://www.taromuseum.jp>

第29回 岡本太郎現代芸術賞展

会期：2026年(令和8)年1月31日(土)～3月29日(日)

主催：川崎市岡本太郎美術館

公益財団法人岡本太郎記念現代芸術振興財団

編集 川崎市岡本太郎美術館
展覧会担当 喜多春月、千村曜子、細川茉莉香
撮影 井上博司、榊原陽子
デザイン 須藤久瑠実(株式会社アトミ)
制作・印刷 株式会社アトミ

2026(令和8)年1月発行

©Taro Okamoto Museum of Art, Kawasaki 2026

